

★特集★ 高松城を発掘する！その2 ～ 玉藻公園の歩き方～

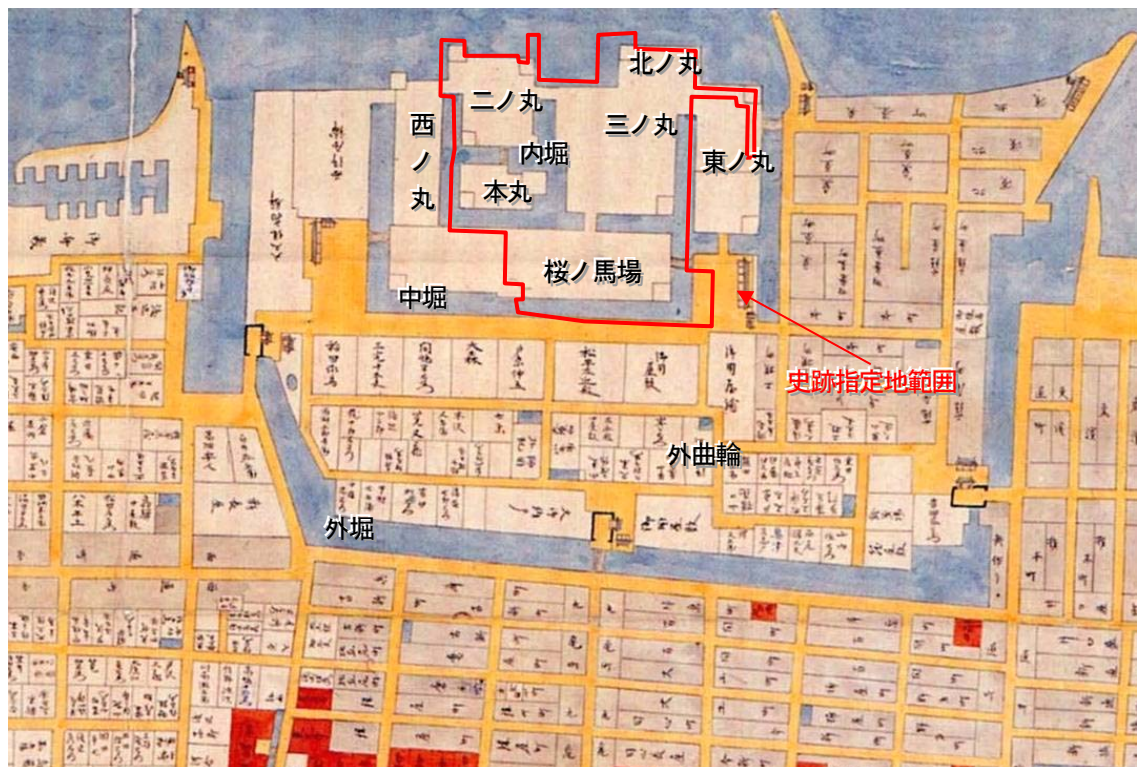
玉藻公園は散策、花見、お茶会、植木市など、一年を通して市民の憩いの場となっています。江戸時代は高松城であったことは知っていても、きれいに整備された現在の公園の印象が強く、お城の雰囲気は薄れています。今回は、古写真・絵図・発掘調査成果を元に、意外に知られていない「城」の様子を紹介したいと思います。

高松城の歴史

天正15年(1587)に讃岐一国を与えられた生駒親正は、翌天正16年(1588)から数箇年かけて高松城を築城しました。このとき、「野原」の地名を「高松」と改めました。生駒氏の治世は寛永17年(1640)の生駒騒動による転封まで4代54年間に及びました。生駒氏転封後の寛永19年(1642)には、松平頼重に東讃12万石が与えられました。頼重は寛文10年(1670)に天守を改築し、翌年から東ノ丸、北ノ丸を新造し、2代藩主頼常は月見櫓や長櫓などを建て、大手を南側から南東側に移動し、三ノ丸に御殿を建てました。その後、城は大きく改変することなく、11代にわたって松平氏の居城としてその姿を見せていましたが、慶応4年(1868)、官軍に開城することとなりました。明治期に外堀は埋め立てられ市街化が進み、城郭の北側も埋め立てが行われ海城の雰囲気が薄れました。また、中堀より内側は兵部省(のち陸軍省)の管轄となり、城郭建物の多くは破却され、明治17年(1884)には老朽化を理由に天守の解体が行われました。明治23年(1890)に再び松平家に払い下げとなり、天守台に玉藻廟、三ノ丸に現在の披雲閣が建築されました。昭和29年(1954)に高松市の所有となり、昭和30年(1955)に国史跡として指定され、玉藻公園として市民に親しまれています。

高松城略年表

中世	港町「野原」が栄える。
天正16年(1588)	生駒親正により高松城築城開始
寛永17年(1640)7月	生駒高俊が出羽矢島1万石に転封
寛永19年(1642)2月	松平頼重が東讃12万石を与えられる
寛文10年(1670)8月	小倉城天守を模倣した天守完成
寛文11年(1671)	東ノ丸・北ノ丸を新造開始
延宝5年(1677)5月	長櫓完成
慶応4年(1868)1月	官軍に高松城開城
明治17年(1884)	天守解体
明治23年(1890)	松平家へ払い下げ
大正6年(1917)6月	披雲閣完成
昭和20年(1945)7月	高松空襲により桜御門焼失
昭和29年(1954)1月	高松市の所有となる
昭和30年(1955)3月	国史跡に指定
昭和30年(1955)5月	玉藻公園として市民に開放



享保年間高松城下図 (高松市歴史資料館蔵)

歴史城主

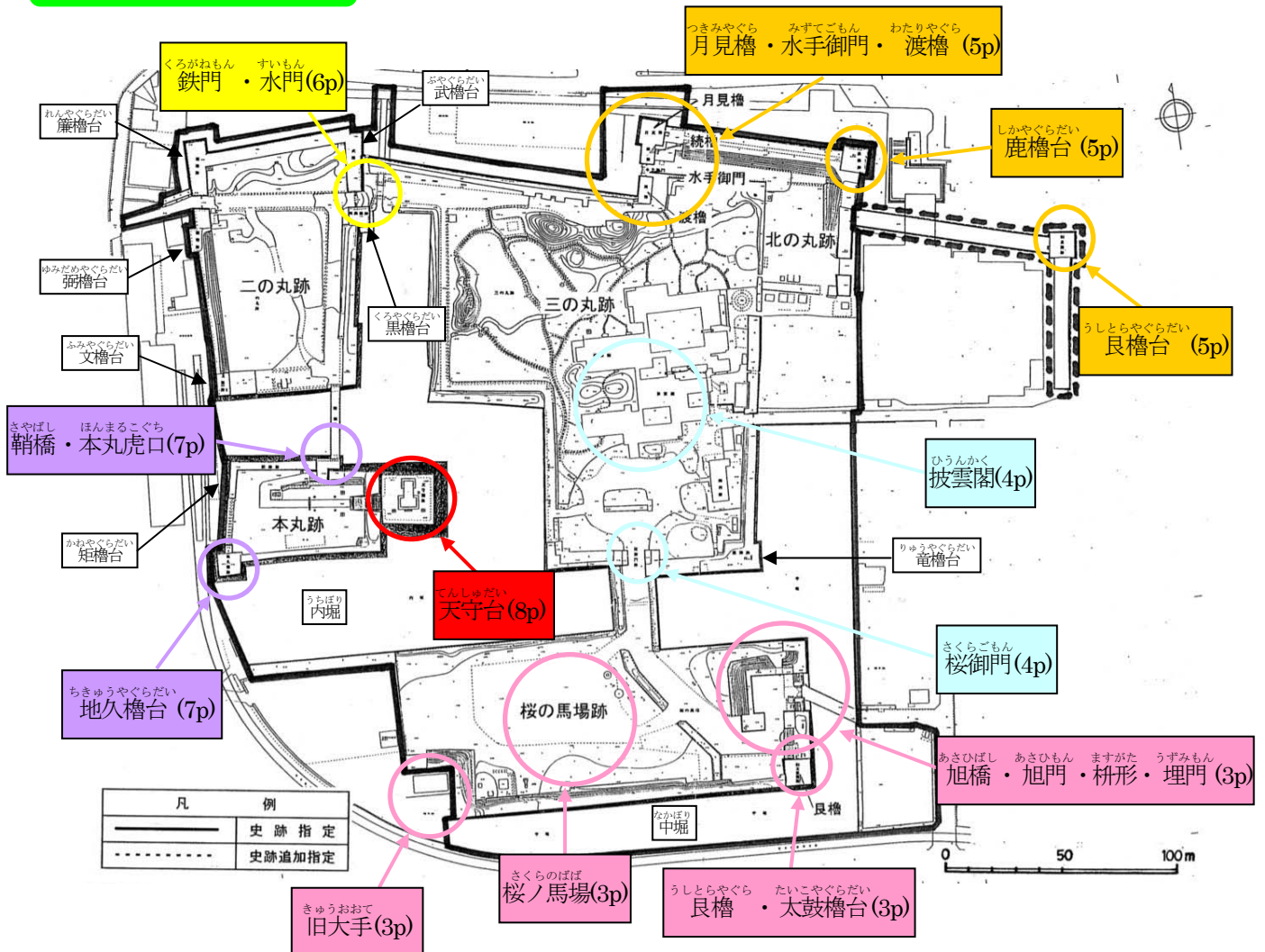
生駒氏 4 代、松平氏 11 代の城主がいました。松平頼重は水戸光圀(黄門)の兄です。兄を差し置いて水戸家を継いだ光圀は、頼重の子綱條(つなえだ)を水戸家の後継とし、実子頼常を高松松平家の後継としました。その後も何度か水戸家との間で養子縁組が行われています。

歴代城主一覧

	城主	生没年	城主期間	主な事跡
1	生駒親正(ちかまさ)	1526~1603	1587~1601	信長・秀吉に仕える。関ヶ原の戦いでは西軍に参加。
2	生駒一正(かずまさ)	1555~1610	1601~1610	関ヶ原の戦いで東軍に参加。讃岐一国を安堵される。
3	生駒正俊(まさとし)	1586~1621	1610~1621	大阪冬の陣・夏の陣に参加。大阪城の普請にも参加。
4	生駒高俊(たかとし)	1611~1659	1621~1640	生駒騒動により出羽矢島 1 万石に転封。
1	松平頼重(よりしげ)	1622~1695	1642~1673	常陸下館より高松へ入部。高松城の大改修を行う。
2	松平頼常(よりつね)	1652~1704	1673~1704	頼重の大改修を引き継ぐ。財政建て直し、学問を奨励。
3	松平頼豊(よりとよ)	1680~1735	1704~1735	地震・大火など災害の頻発で藩財政窮乏。
4	松平頼桓(よりのたけ)	1720~1739	1735~1739	藩士の減禄、倹約令など財政緊縮に努める。
5	松平頼恭(よりのたか)	1711~1771	1739~1771	精糖法の研究・塩田開発等殖産の奨励。平賀源内を登用。
6	松平頼眞(よりのざね)	1743~1780	1771~1780	財政の引締めと民政の復興を行う。藩校講道館を建設。
7	松平頼起(よりのおき)	1747~1792	1780~1792	度重なる大干ばつ発生。領民に米を貸す等善政を施す。
8	松平頼義(よりのり)	1775~1829	1792~1821	地場産業の振興を行うも、藩札発行でインフレを招く。
9	松平頼恕(よりのひろ)	1798~1842	1821~1842	財政再建果たす。『歴朝要記』の編纂を行う。
10	松平頼胤(よりのたね)	1810~1877	1842~1861	攘夷防衛の要所警固や水戸藩政後見を担い江戸詰め。
11	松平頼聰(よりのとし)	1834~1903	1861~1869	朝敵とされ恭順の厳しい選択をする。上京し後に伯爵。

玉藻公園の見所

園内の見所マップです。各ページに解説があります。このほか、陳列館では高松城の歴史が学べ、内苑御庭等では各季節の植物が楽しめます。



旭門から入ろう

玉藻公園には東西2箇所に入ります。江戸時代にもこの2箇所に入門がありましたが、城の雰囲気を楽しむためには、内曲輪の大手である東側の旭門がお勧めです。旭橋は門に対して斜めに架橋され、敵の直進を防ぎ横矢をかける構造だったことがわかります。また、門をくぐると来訪者を威圧するかのような切石の石垣による枡形があり、北側には石垣をトンネル状に構築した埋門もあります。なお、現在の駐車場は、かつて「大下馬」と呼ばれる馬を降りる場所でした。



旭門に対して斜めに架かる旭橋



見事なモザイク状の石垣

移築された良櫓

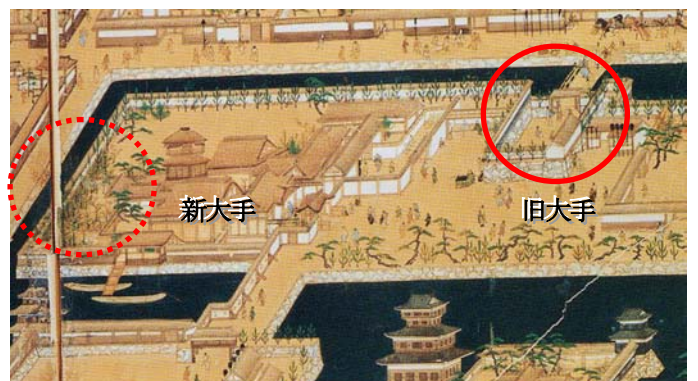
旭門を入ると南手に見える櫓が良(うしとら)櫓です。重要文化財に指定されています。古文書によると延宝5年(1677)に完成した櫓です。良(丑寅)とは北東の方角を意味します。本来は城の北東にありましたが、昭和42年に太鼓櫓台に移築されたものです。よく見ると鉄砲狭間が園内に向けて設けられているので、移築されたことがわかります。



太鼓櫓台跡に移築された良櫓

桜ノ馬場と旧大手

良櫓をすぎると、今では桜の名所となった桜ノ馬場があります。17世紀中頃までは武家屋敷や馬屋があり、『高松城下図屏風』に見られるように大手は南側にありましたが、寛文11年(1671)からの大改修により大手を旭門に移動し、馬場として使用されるようになりました。現在も公園内の南西端には旧大手枡形の石垣が現在も残っています。なお、江戸時代には桜ノ馬場は現在の中央通りの西側あたりまで伸びていました。



高松城下図屏風(香川県立ミュージアム蔵)
馬場として使用されておらず、旧大手が描かれている

覚えておこう！城郭用語(築城編)

平城(ひらじろ)・・・平地に築かれた城
山城(やまじろ)・・・山の上に築かれた城
平山城(ひらやまじろ)・・・低い山の上から麓まで城としたもの
水城(みずじろ)・・・水際に築かれた城、海際のは海城
縄張(なわばり)・・・城地の選定及び曲輪配置等の全体設計
曲輪(くるわ)・・・堀・土塁・石垣等で仕切られた空間
本丸(ほんまる)・・・天守などが所在する最も中心の曲輪

内曲輪(うちくるわ)・・・城内の中心部分
大手(おおて)・・・城の正門、裏門は搦手(からめて)
虎口(こぐち)・・・門の入口部分
枡形(ますがた)・・・門部分を四角く囲った空間
横矢(よこや)・・・弓や鉄砲などで敵を側面から攻撃すること
折れ(おれ)・・・横矢をかけるため作った城壁の屈曲部分
普請(ふしん)・・・土木工事のこと

焼失した桜御門

三ノ丸の入口には桜御門という櫓門があり昭和20年(1945)7月の高松空襲により焼失してしまいました。石垣には火災により赤く焼けた痕跡や石材の表面が弾け飛んだ痕跡があります。また、現在も地面に残る礎石には柱に使用された鉄製金具の錆跡が茶色く残っており、往時の姿を偲ぶことができます。



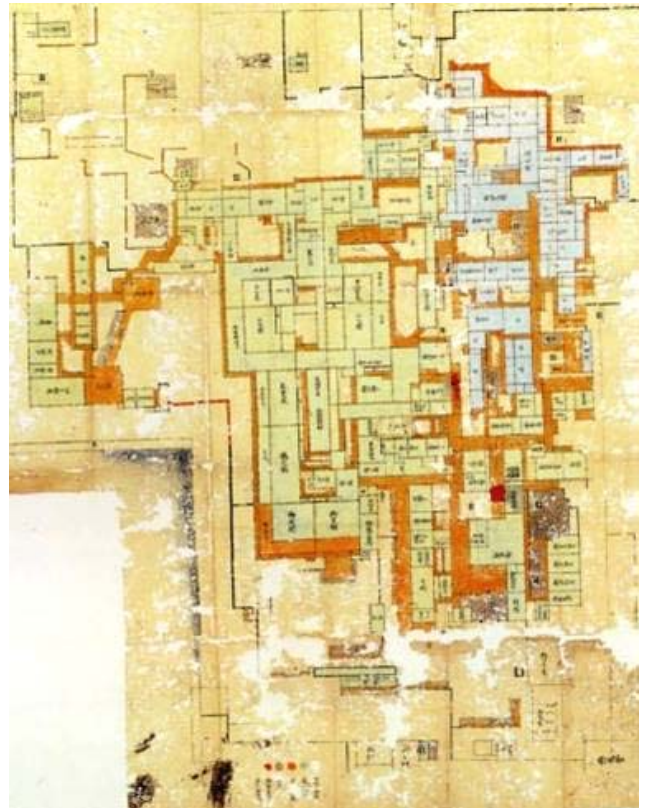
焼失前の桜御門 (財松平公益会蔵)

披雲閣古今

現在三ノ丸に現存する披雲閣は、松平家第12代当主頼壽(よりなが)伯爵の別邸として大正3~6年(1914~17)に清水組(現清水建設)により建てられた建物です。それでは江戸時代の藩主はどこに住んでいたのでしょうか? 天守に住んでいたと思われがちですがそうではありません。御殿と呼ばれる建物が居住に使われました。絵図によると、築城時には本丸、その後本丸と二ノ丸の2箇所建てられていましたが、寛文11年(1671)からの大改修により、三ノ丸に御殿が移りました。この御殿も披雲閣と呼ばれており、『披雲閣古図』によると現在の披雲閣の2倍くらい大きさがあったようです。



現在の披雲閣



披雲閣古図(高松市歴史資料館蔵)
江戸時代の披雲閣を描いた絵図

ちょっと気になるお城の話 その1

全国には数万のお城があったと言われていました。えっ? そんなにあったの?と思われるかもしれませんが、中世には各村々の有力者が屋敷を堀で囲んだだけの簡単な城構えをしていました。次いで日本全体が平定される過程で、新たな領主として信長・秀吉・家康から配置された大名により、築城ラッシュとなります。それまでの在地領主に比べ経済基盤も大きく、鉄砲や大砲の使用が広まったことや、築城技術が飛躍的に向上したこともあって、石垣を多用し、堀幅も広くとり、高層の建物が造られるようになりました。さらに元和元年(1615)の一国一城令により、それ以前に築城された城の多くが取り壊されたため、「石垣」、「水をたたえた堀」、「高層の天守・櫓」といった城のイメージが出来上がったのです。

覚えておこう! 城郭用語 (建物編)

天守(てんしゅ)・・・本丸に建つ城郭内最高層の建物
櫓(やぐら)・・・物見等を目的として建てられる建物
多聞(たもん)・・・石垣の上部に作られた長屋
御殿(ごてん)・・・藩主の居住及び藩政をつかさどる場所
塗籠(ぬりごめ)・・・漆喰を塗った壁
下見板張り(したみいたばり)・・・横板を張った壁

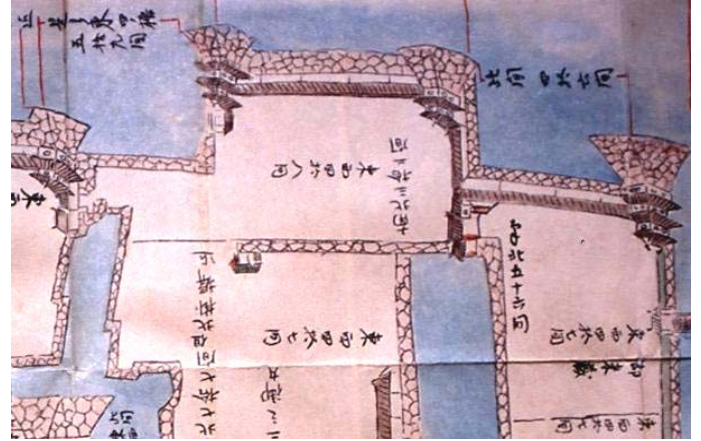
櫓門(やぐらもん)・・・門の上部を櫓としたもの
埋門(うずみもん)・・・石垣に埋め込まれたような狭い門
狭間(さま)・・・鉄砲や矢を射るために扉や櫓に開けた穴
石落とし(いしおとし)・・・壁を張り出し下の敵を攻撃する場所
破風(はふ)・・・屋根の装飾、千鳥・唐・入母屋破風がある
作事(さくじ)・・・建築工事のこと

北ノ丸・東ノ丸の新造

北ノ丸は寛文11年(1671)から新造された曲輪です。現地の石垣にもその痕跡は残っており、継ぎ足した跡を見ることができます。月見櫓は延宝4年(1676)に上棟、長櫓は延宝5年(1677)に初神拝の記録が残っており、この頃に現在の城の景観が出来上がったと考えられます。古写真も多く残っており、長櫓が東ノ丸にあったことや、現存しない鹿櫓の様子もうかがえます。江戸時代には水手御門から小舟で出、沖に停泊する御座船飛龍丸に乗船し、遊覧を楽しんだり、参勤交代に出かけたりしていたようです。なお、月見櫓は着見(=着くを見る)から名付けられたと言われています。現存する月見櫓(続櫓を含む)・水手御門・渡櫓は重要文化財に指定されています。



生駒家時代讃岐高松城屋敷割図 (高松市歴史資料館蔵)
北ノ丸は無く、城の北側に「捨石」の記載が見られる



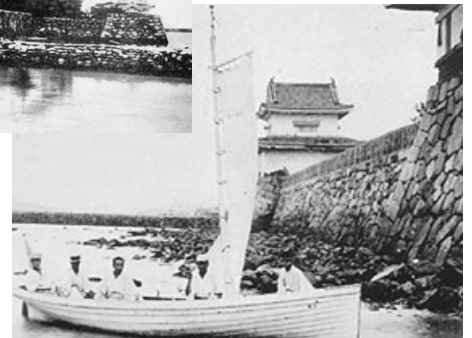
高松城内図 (鎌田共済会郷土博物館蔵)
北ノ丸・東ノ丸が完成し、櫓が描かれる



渡櫓に見られる石垣の継ぎ足し痕跡



東ノ丸北東隅の長櫓
(財松平公益会蔵)
奥に月見櫓が写る



鹿櫓
(財松平公益会蔵)



現在の月見櫓・水手御門・渡櫓



高松築港工事による埋め立て (明治34~37) 以前の状況
(財松平公益会蔵)

ちょっと気になるお城の話 その2

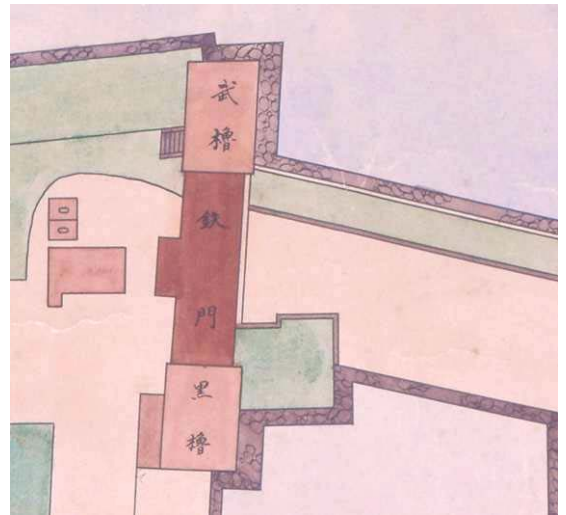
城には「戦い」が付き物ですが、高松城は戦いを経験していない城です。高松城が築城された天正16年(1588)には、既に豊臣秀吉により九州から東海地方まで平定されていました。また、慶応4年(1868)鳥羽伏見の戦い後に朝敵となり、土佐藩を中心とする官軍に包囲された時も戦わず開城しています。

昔はなかった？水門

二ノ丸の入口の水門は、堀と海をつなぐ重要な役割を担っています。『旧高松城御城全図』には水門は描かれず、柵形が描かれています。また、二ノ丸北側の石垣には、石垣を一度取り壊して水門を作った痕跡が見られます。このことから、水門は現在のような形ではなく、また、現在の場所に無かった可能性が高いと考えられます。絵図では、内堀・中堀は直接海とは接しておらず、どのように堀の水の管理をしていたのか不明です。

解体修理を終えた鉄門石垣

鉄門(くろがねもん)は二ノ丸の入口に位置し、その名の通り鉄板を張った門だったようです。平成15年10月に鉄門の西面石垣が崩れ、平成16・17年度において解体修理を行いました。修理に際しては、石材1石ごとに番号を付け、50cm間隔で墨を打ち、元の場所に戻しています。石垣解体に伴う発掘調査では、石垣内部の盛土から17世紀中頃の土器が出土し、豊島石の切石で作られた東西約2.3m、南北約1.3m、深さ約80cmの穴蔵が発見されました。文献史料によると、寛文2年(1662)に北西隅櫓(簾櫓と考えられる)に落雷があり、武櫓付近まで類焼し武具などが焼けたという記載があり、この頃に石垣を修築し、防火対策として穴蔵を作ったと考えられます。また、石垣の裏栗石層からは、多量の五輪塔が出土しており、石材不足を補ったと考えられます。



旧高松城御城全図 (香川県立ミュージアム蔵)
鉄門の記載があり、外柵形が描かれる



解体修理前の鉄門西面石垣



解体修理完成後の鉄門西面石垣



解体修理の状況



発掘調査で検出された穴蔵

ちょっと気になるお城の話 その3

城では「横矢をかける」と言って、敵に対して2方向以上から鉄砲や弓矢を射掛ける工夫をしています。柵形は敵をその中に閉じ込め3方向から射撃できます(例:太鼓門柵形)。柵形になっていない門でも左右どちらか一方の石垣を前に出せば、門に襲いかかった敵を側面から射撃できます(例:桜御門・鉄門・本丸虎口)。さらに、長大な石垣には少し折れをつけることによって側面射撃を可能にするとともに、敵を有効射程距離でとらえることができます(例:二ノ丸東面)。

屋根がなかった鞆橋

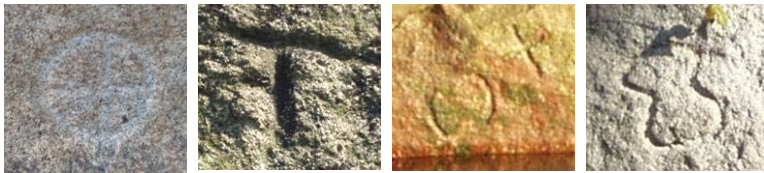
現在、屋根のある鞆橋(さやばし)ですが、当初は屋根の無い構造で、「らんかん橋」と呼ばれていたようです。詳細な時期は不明ですが、文政6年(1823)の絵図『讃岐国高松城石垣破損堀浚之覚』(臼杵市教育委員会蔵)には屋根が描かれていることから、江戸時代の中頃に屋根付きの橋になったと考えられます。屋根が無い構造の方が本丸に迫った敵に鉄砲や矢を射るためにはいいのですが、太平の世になり防御の必要性が薄れ、橋の老朽化を防ぐ目的で屋根が付けられたと考えられます。



本丸と二ノ丸をつなぐ唯一つなぐ鞆橋

刻印石が多く見られる本丸虎口

本丸虎口には刻印石が多く見られます。○、×、分銅形、長方形など様々な形が見えます。このような刻印は、地久櫓、矩櫓といった本丸部分に多く見られる他、渡櫓、龍櫓、旧大手門枳形などにも見られます。単純な記号であることから、何の印なのかは分かっていませんが、多くは隅角部の算木積みに見られることが特徴です。刻印がどこにあるのか探してみることも、城を楽しむ方法の一つです。



刻印石の例

穴蔵が発見された地久櫓台

地久櫓は本丸の南西に位置していた櫓で、絵図では2重の櫓として描かれています。石垣解体修理に伴う発掘調査において東西4.8~5.2m、南北4.3m、深さ1.8mの穴蔵が発見されました。通常、天守や櫓の穴蔵は石垣を削り抜いて地下から直接出入りするのですが、検出された穴蔵は石垣からの出入口が無く、1階から出入りしたと考えられます。



『高松城下図屏風』(香川県立ミュージアム蔵)
鞆橋の位置に屋根の無い橋が描かれている

ちょっと気になるお城の話 その4

お城といえば天守閣をイメージしますが、「天守閣」は明治以降の造語で、江戸時代には「天守」と呼んでいました。天守は太平の世には無用のもので、ほとんど使用されない建物でした。高松城の天守は、古文書によると最上階が「諸神の間」と呼ばれ、神様や仏様を祀っていて、1・5・9月に神事を行っていたようです。



地久櫓台検出穴蔵

覚えておこう！城郭用語(石垣編)

野面(のづら) ……自然のままの石
 布積み(ぬのづみ) ……横方向に目地が通るような積み方。
 乱積み(らんづみ) ……目地が通らない乱雑な積み方。
 落とし積み(おとしづみ) ……石と石の間に斜めに落とし込んだ積み方。
 間知積み(けんちづみ) ……面が長方形の石材を交互に斜めに積んだもの。
 鏡石(かがみいし) ……面を大きく見せ、控えが短いもの。
 天端(てんば) ……石垣の最上部。
 根石(ねいし) ……石垣の一番下の基礎石。
 隅角(ぐうかく) ……石垣の角。内と外に折れる角で入隅・出隅と区別する。
 算木積み(さんぎづみ) ……出隅にある石の長辺を左右交互にする積み方。

築石(つきいし) ……石垣を構成する石材。間詰め以外のもの。
 間詰め(まづめ) ……築石の間に詰められた小さい石。
 目地(めじ) ……石と石の隙間。
 勾配(こうはい) ……石垣の角度。直線のノリと曲線のソリからなる。
 合端(あいは) ……石と石の接点。
 栗石(ぐりいし) ……石垣の背面に積む石のこと。
 盛土(もりど) ……石垣の背面に盛られた土のこと。
 胴木(どうぎ) ……根石の下に敷かれた木のこと。
 矢穴(やあな) ……石を割るためにつけられた穴。
 石工(いしく) ……石垣をつくる職人。

四国最大の天守

生駒期の天守は外観や内部の構造については不明ですが、絵図や古文書によると3重だったとされています。この天守を改築したのが松平頼重です。改築された天守は3重5階(3重4階+地下1階)建て、寛文10年(1670)に完成しています。天守の最上階が下の階より張り出した南蛮造り(唐造り)で、さらに地上1階部分も石垣より張り出した構造となっていました。その大きさは、『小神野筆帖』によると「高17間半、内石垣4間」とあるため、地上部分の高さは13間半であることが分かります。1間を6尺5寸(約197cm)と仮定すると、26.6mとなります。四国最大の規模を誇った天守も、明治17年(1884)に老朽化を理由に取り壊されました。跡地には、松平頼重により明治34~35年(1901~1902)に初代頼重を祀る玉藻廟が建築されました。昭和19年(1944)には戦火を避けるため、屋島神社に御神体(理兵衛焼頼重像)を遷座し、その後、昭和31年(1956)に(財)松平公益会敷地内に新玉藻廟が建設され、再遷座しています。天守台上の旧玉藻廟はその傷みが激しいことから、石垣修理工事に伴い平成18年(2006)9月から11月にかけて記録保存を行い解体しました。



高松城天守古写真 (財)松平公益会蔵



天守台に建っていた玉藻廟



玉藻廟拝殿唐破風内装飾



玉藻廟内部



玉藻廟拝殿床下

『小神野筆帖』仁(瀬戸内海歴史民俗資料館蔵)

一天守五重間数高拾七間半

内石垣四間

天守台石垣上東西拾二間南北拾間半

シヤチホコ高六尺五寸貞享四卯九月供(洪)水ニシテ

丸三尺三寸 シヤチホコ西手吹折

諸神之間 東西七間 南北六間 此疊八拾帖

二之間 同 五間 同 六間 此疊六拾帖

三之間 同 九間 同 八間 此疊百四拾四帖

四之間 同拾二間半 同拾一間半 此疊百八拾七帖

同下 同六間 同五間 此疊六拾帖

編集後記

いよいよ始まった高松城天守台石垣の大修理プロジェクト。築城から400年余りが過ぎた高松城に、また1つ新たな歴史が刻まれようとしています。修理に伴い実施される天守台上部の発掘調査や石垣解体などにより、いろんな新発見が得られることでしょう。これからの発掘調査や石垣解体に目が離せません。次号では天守台の発掘調査成果速報をご紹介しますと思います。(K.O)

むかしの高松 第20号 2006.12.28

編集発行/高松市教育委員会
高松市番町一丁目8番15号
TEL087-839-2660
<http://www.city.takamatsu.kagawa.jp/>